

学力向上に関するこれまでの施策とPISA2009の結果

これまでの主な施策

- 「学びのすすめ」公表(平成14(2002)年1月)
 - ①基礎・基本の確実な定着、②発展的な学習の推進、③宿題を出すなど家庭学習の充実や、朝読書の推進 など
- 学習指導要領(平成15(2003)年12月)等の一部改正
 - 子どもの実態に応じた、発展的内容の指導を充実
(「学習指導要領の基準性」を明確化、教科書に「発展的な学習内容」の記述)
- 「読解力向上プログラム」策定(平成17(2005)年12月)
 - PISA型「読解力」の育成を目指し、読書活動の充実など、学校、国・教育委員会での取組を明示。
- 「全国学力・学習状況調査」実施(平成19(2007)年4月～)
 - 調査結果等を踏まえた、学校、国・教育委員会での取組による検証改善サイクルの構築。



PISA2009の結果

- 読解力を中心に我が国の生徒の学力は改善傾向にある。
 - 〔各リテラシーとも、2006年調査と比べて、レベル2以下の生徒の割合が減少し、レベル4以上の生徒の割合が増加している。〕
- しかしながら、トップレベルの国々と比べると下位層が多い。

(例)読解力の習熟度レベル別割合

- 読解力については、必要な情報を見つけ出し取り出すことは得意だが、それらの関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすることがやや苦手である。

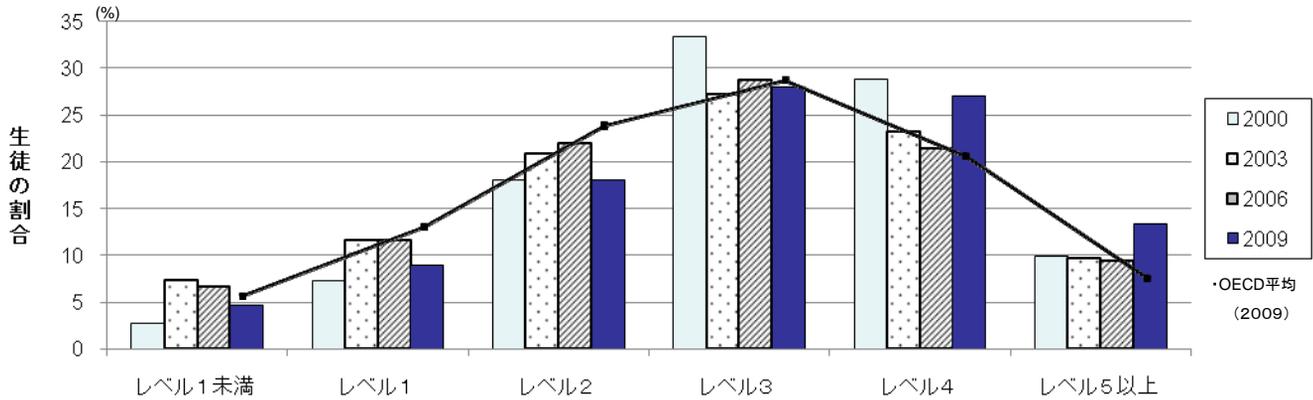
	レベル1以下	レベル2	レベル3	レベル4以上
日本	13.6%	18.0%	28.0%	40.4%
韓国	5.8%	15.4%	33.0%	45.8%
フィンランド	8.1%	16.7%	30.1%	45.1%
香港	8.3%	16.1%	31.4%	44.3%

(「情報へのアクセス・取り出し」530点(平均正答率74%)、
「統合・解釈」520点(平均正答率62%)、「熟考・評価」521点(平均正答率59%))

- 数学的リテラシーについては、OECD平均は上回っているが、トップレベルの国々とは差がある(順位の幅 8~12位)。
- 「趣味で読書をすることはない」生徒の割合は、2000年調査から減少(44.2% ← 55.0%)したものの、諸外国(OECD平均37.4%)と比べると依然として多い。

PISA わが国の習熟度レベル別の生徒の割合（経年変化）

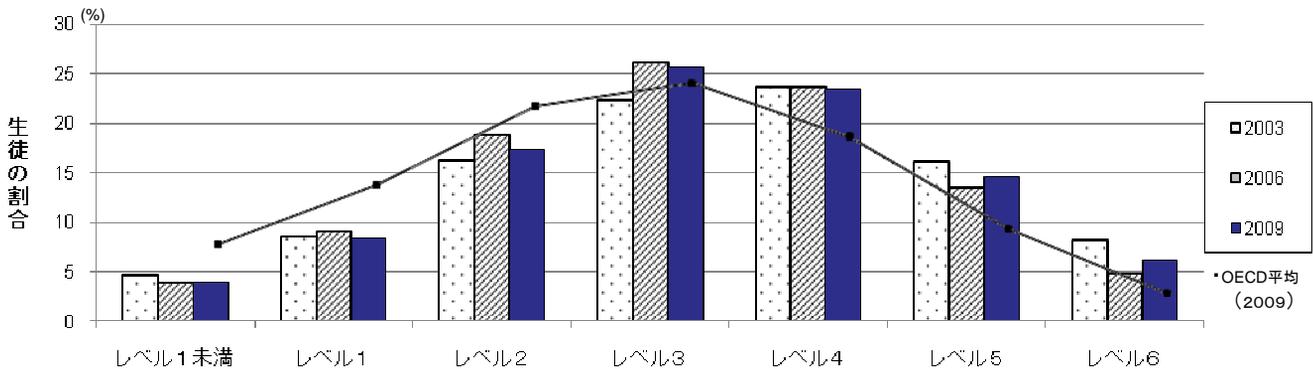
○ 読解力



● PISA2009では、PISA2006に比べて、レベル2以下の生徒の割合が減少し、レベル4以上の生徒の割合が増加。

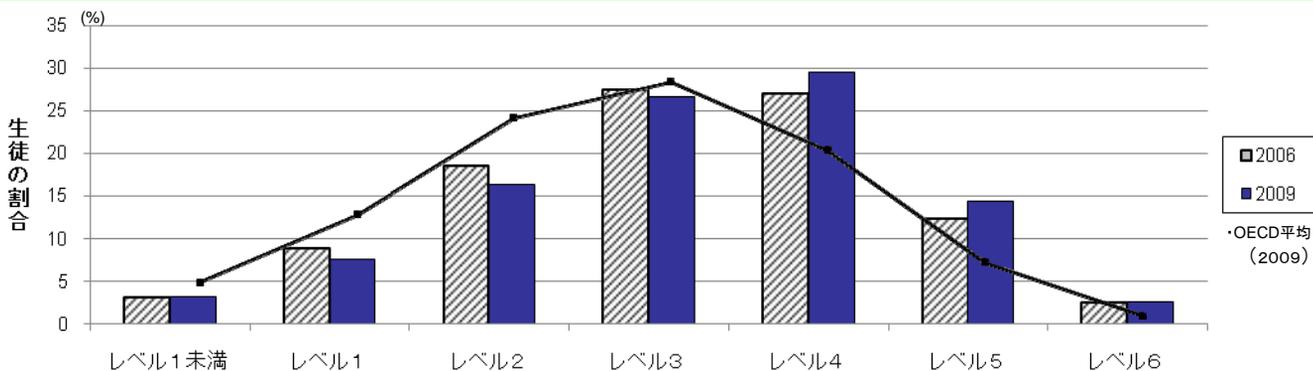
※比較のため、レベル1未満には2009年調査におけるレベル1bおよびレベル1b未満を、レベル5以上にはレベル5およびレベル6を含めている。

○ 数学的リテラシー ※習熟度レベル別の生徒の割合はPISA2003から調査を開始



● PISA2009では、PISA2006に比べて、レベル2の生徒の割合が減少し、レベル5以上の生徒の割合が増加。

○ 科学的リテラシー ※習熟度レベル別の生徒の割合はPISA2006から調査を開始



● PISA2009では、PISA2006に比べて、レベル1、2の生徒の割合が減少し、レベル4及び5の生徒の割合が増加。